

チャハル・八オトクとその分封について

森 川 哲 雄

目 次

- 一、はじめに
- 二、チャハル・八オトク
- 三、Dayan qayanの諸子分封とチャハル
- 四、チャハルのオトク以下の小集団に対する分封
- 五、おわりに

一、はじめに

チャハル Čaġar は一六世紀以降モンゴルの大ハーンの根拠地となり、かついわゆる中期モンゴルの六万戸の一つに数えられる、重要な部族集団であった。このチャハル部の起源についてはすでに岡田英弘氏が「ダヤン・ハーンの六万戸の起源」(『榎博士還暦記念東洋史論叢』、東京、一九七五)の中で一つの仮説を述べられ、また和田清

チャハル・八オトクとその分封について 森川

第五十八卷 一二七

氏は「察哈爾部の変遷」や「達延汗について」（いずれも『東亜史研究（蒙古篇）』、東京、一九五九、所収）の中で、一六〇一七世紀のチャハル部の動きについて精微な考察をされている。

ところで筆者は一五〇一七世紀のモンゴルの社会制度を考察する目的で、いわゆる六万戸といわれるうちの、いくつかの万戸（トゥメン）の集団構成について検討してきた。⁽¹⁾その結果不十分ではあるが、当時のモンゴリアに存在したいわゆる社会集団の性格について従来の見解とは若干異った結論を得たのである。こうした観点からみるとチャハルの集団構成も甚だ興味のあるものであるが、先の和田氏の研究を見る限り全く不十分と言わざるを得ない。言うまでもなくそれは検討された史料が漢文中心であったためであるが、最近ではモンゴル文史料も結構多くなり、中にはチャハルについて伝えたものも少なくない。従って本稿ではまずチャハルの集団構成について明らかにし、更にはそれらの諸子分封についても検討し、いわゆる中期モンゴル社会を考察する一つの材料を提供し、併せてそれに関連する問題にもふれるつもりである。

二、チャハル・八オトク

チャハルを構成する集団について時代的に最も早く伝えているのは明側の資料の皇明九辺考であるが、その巻三、三関鎮辺夷考に、

北虜亦克罕一部、掌住牧此辺、兵約五万、為營者五、曰好城察罕児、曰克失旦、曰卜爾報、東營曰阿児、西營曰把郎阿児、入寇無常。

とある。ここに記された「五營」についてはすでに和田氏の検討されたところであるが、筆者もこの記事について若干ふれ、その中で、万戸（トゥメン）を左・右（東・西）両翼に分けているはずの「即」阿児（*Jegün Yar*）と把郎阿児（*Barayun Yar*）が克失旦（*Kesigten*）などのオトク（*otoγ*）と同列に並べるのはおかしく、従ってこの時チャハルに五營あったというのは疑問である、と述べた。⁽³⁾

ところでモンゴル文年代記、史料はチャハルについて言う場合、一貫して「八オトク」と称している。一方明側の史料でも万暦の終り頃からチャハル部を「八大營」と記すことが多くなってくる。⁽⁴⁾従ってこの「八オトク」と「八大營」が同じものを指したということは間違いない。しかし明側の史料にはその「八大營」が如何なるものであったかは具体的に何も伝えられていない。ひるがえってモンゴル文史料をみると、一部に「八オトク」についてふれたものがある。しかしそれはアルタン・トプチ（*Altan Tobči*）や蒙古源流のような、古い、そして代表的なモンゴル年代記ではなく、ガンガイ・ウルスハル（*Gangga-yin Uruṣḡal*）（一七二五年）やアルタン・クルドゥン・ミンガン・ゲグスト・ビチク（*Altan Kirdün Mingyan Gegesütü Bičig*）（一七三九年）のような、比較的新しい、しかもモンゴリア全体がすでに清朝の支配下に入り、更に従来とはかなり異った部族再編成の過程を経た時代のものであった。これらの年代記のチャハルについての伝聞はすでに前稿で一部ふれたが、今厭わず再びここに引用してみよう。

まずガンガイ・ウルスハルは、

八オトク（*Caḡar*）は *Alūd* と *Kesigten*、*Uḡan*、*Naiman*、*Tatar* せらは山國の「四オトク」である。

チャハル・八オトクとその分封について

森川

第五十八卷 一二九

Üjümüčün' Qayučid' Kemegcid' Qalqa これらは〔山陰の〕四オトクである。⁽⁶⁾
と伝える。一方これに対しアルタン・クルドゥンは、

Čagar tümen 𐰽 Augan' Naiman' Sönid' Üjümüčün'〔これらは〕山陽の左の四ヌトク（オトク）である。
Joyid' Borod' Alay' Alayčud これらは山陰の右の四ヌトク（オトク）という。

と記している。⁽⁶⁾一見して両者の間にはかなりの相違があることが分るが、これは前稿で述べたように、アルタン・クルドゥンの記事は Alay' Alayčud という恐らくは同一集団を二つにしてみたり、Joyid' Borod など他の史料には全く見られないオトク名を入れたりして、あまり信用出来ない。一方ガンガイン・ウルスハルは、先の記事にも見られる Üjümüčün の年代記であることや、その他のモンゴル文年代記の中で、チャハルに所属するとされている多くのオトク名を含んでいることから、大勢はガンガイン・ウルスハルに従うべきであると思われる。⁽⁷⁾

しかしガンガイン・ウルスハルの記事にも多くの問題が残っている。以下その記事を中心に少し検討してみよう。まず右翼四オトクについてであるが、ガンガイン・ウルスハルはこれを Üjümüčün' Qayučid' Kemegcid' Qalqa としている。これらのうち Üjümüčün は欽定外藩蒙古回部王公表伝、卷三四、烏珠穆沁部総伝に、

元太祖十六世孫圖噶博羅特、由杭愛山徙牧翰海南、子博第阿喇克繼之。有子三。〔中略〕、次翁袞都喇爾、号其部曰烏珠穆沁。〔中略〕与察哈爾同族、為所屬。

とあることより、これがチャハルに所属したことは疑いが無い。⁽⁸⁾次に Qayučid は蒙古源流に、ダヤン・ハーンの諸子分封を記して、

〔Dayan qayran の子〕Arbolad は Qagar の Qayru'id の上に〔座した。〕

とあることや、⁽⁹⁾王公表伝、卷三五、浩齊特総伝に、

元太祖十六世孫圖魯博羅特、再伝至庫登汗、号其部曰浩齊特。〔中略〕庫登孫德格類、号額爾德尼琿台吉、子

五。〔中略〕与察哈爾同族為所属。

とあって Qayru'id (浩齊特) もチャハル (察哈爾) に所属していたことは全く疑いがない。

これに対し Kemeg'id とするのはどうか。Kemeg'id という名の集団では今のところ他の如何なる史料にも見えないが、これは恐らく Kemjig'id の誤りとみてよからう。そうであればこの名称を持った集団はアルタン・トブチにも蒙古源流にも見られるものである。⁽¹⁰⁾一方シラ・トゥージは Ujumucin' Qayru'id の系譜について、王公表伝とほぼ同じことを記した後で、

〔Daraysun〕Gödeng qayran の第三子 Bay(-a) dargan noyan' その子 Lasai dayicing' その子 Lamajab erke noyan' その子 Nanjan erdeni' Ögeled yelden bayatur' 이들은チャハルの上に座した。

とある。⁽¹¹⁾ただこの記事では彼らがチャハルのどの集団に「座した」のかは不明であるが、蒙古源流に、一五八八年チャハルの Tümen jasar'u qayran がダライ・ラマを招こうとしたこととして、

それと共に同時にチャハルの Tümen qayran の使者 Kisiqten の Tümei qong tayij' Kemjig'id の Bay-a dargan noyan を始め、千人と一万頭の駅馬を連れて来た時に、聖ラマがおっしゃるには、〔以下略〕

という記事が見える。⁽¹²⁾この蒙古源流に記される Kemjig'id の Bay-a dargan noyan とシラ・トゥージに見えるチャ

ハルの *Bara dargan noyan* が同一人物であることは何の疑いも無い。従ってシラ・トゥージに伝えられる *Bara dargan noyan* の系統が *Kenjigüd* を領したことは明らかで、蒙古源流の記事と併せて、*Kenjigüd* がチャハルに所属するオトクであったことが裏付けられるのである。

最後の *Qalqa* であるが、これは周知の如く、チャハルとならぶ左翼三トゥメンの一つであつて、この意味からチャハルに所属するオトクに数えることは出来ない。少なくとも他の蒙文年代記にハルハをチャハルの一オトクとするものは全く無く、従つてこの部分はガンガイン・ウルスハルの誤りとみるべきである。右翼が四オトクから成つていたとすればこの部分に何を入れるべきか。これはアルタン・クルドゥンに、「左翼」に所属すると記された *Sönd* が予想される。*Sönd* がチャハルに所属していたという点はやはり王公表伝、卷三六、蘇尼特部総伝に、

元太祖十六世孫圖魯博羅特、再伝至庫克齊圖墨爾根台吉、号其部曰蘇尼特。兄庫登汗、弟翁袞都喇爾台吉。裔詳浩齊特、烏珠穆沁二部伝。庫克齊圖墨爾根台吉、子四。「中略」、初皆服属於察哈爾。

とあることからまず疑いない。問題はこれがアルタン・クルドゥンに記されるようなチャハルの左翼ではなく、右翼に所属したということである。この点について実のところアルタン・クルドゥンの伝えるところがあまり信用出来ないことは *Üjümücin* の所属と同様である。煩瑣な論証は避けるが、王公表伝等により、蘇尼特 (*Sönd*) の始祖庫克齊圖墨爾根台吉 (*Kökecid mergen tayiji*) の兄である庫登汗 (*Gödeng qaγan*) が始祖となつた浩齊特 (*Qayuciid*) や弟の翁袞都喇爾台吉 (*Üngön dural tayiji*) が始祖となつた烏珠穆沁 (*Üjümücin*) の両部が先にふれたようにいずれも右翼部に所属していた、ということを経最大の論拠としたい。この点は後章に掲げる表 (第三表) を参照す

ればうなずけると思う。以上からチャハルの右翼四オトクとは *Üjümüčün* *Qayucüd* *Kemjigüd* として恐らくは *Sunid* である。

一方左翼四オトクについて言うと、ガンガイン・ウルスハルは *Alcud* *Kesigten* *Ugan* *Naiman* *Tatar* の五つの集団をあげている。このうち *Kesigten* については先の皇明九辺考、或いは蒙古源流の記事⁽³¹⁾、王公表伝、卷三三、克什克騰総伝その他によりチャハルに所属したことは疑いが無く、また *Ugan* は他の史料に言う *Augan* のことで、これが *Naiman* と共にチャハルを構成する集団であったことも周知の通りである。残された二つのうち *Alcud* について言うと、これは蒙古源流やアルタン・トプチに見える *Alayčud* もしくは *Alayčuyud* と同一であることは間違いない⁽¹⁴⁾。モンゴル年代記でガンガイン・ウルスハル以外にこれがチャハルに所属すると明記したものは無い⁽¹⁵⁾。これに対して満文老檔、太宗七、天聰元年八月一八日の条に、

その *Caḥar* の *Alakcot* 国の *Bar Baturu* *Nomun Dalai* *Coir Jamsu* の三王が男一五人、女一四人、小児一〇人、馬四五頭を連れて逃げて来て *Han* に跪いて謁した。⁽¹⁶⁾
とあり、また更に同、太宗八、天聰元年、二月一日の条に、

Caḥar の *Alakcot* 国の王 *Dorji Hdeḡg* が妻子、国人を連れて叛いて来たので、*Han* は役所に出て坐った。蒙古から来た王は遠くで一度跪いて叩頭し、ついで御前に進んで *Han* に跪いて叩頭し抱き謁した。

と見える⁽¹⁷⁾。このあたとも満文老檔には *Alakcot* 国に関する記事がしばしば見られるが、いずれも *Caḥar* の所属と記される。従って満文老檔の *Alakcot*、すなわちモンゴル文史料の *Alayčud* (*Alcud*) がチャハルに所属する集団で、

その一オトクを形成していたことは疑いの無いところである。Alayčudは滿文老檔のその後の記事によると、滿州王朝（後金国）に敵対行為を繰返したよう、天聰二年二月、同五月、同八月等、数次に亘る遠征を蒙り壊滅したのであった。このAlayčudはチャハルの中でもかなり大きな集団であつたらしく、天聰二年二月の遠征の際には俘虜になった者が一二〇〇人もいたといふ⁽¹⁸⁾。この結果Alayčudは他の集団とは異なり、旗に編成されることなくその名を消した。実のところチャハルの年代記たるガンガイ⁽¹⁹⁾ン・ウルスハル以外にモンゴル年代記にAlayčudが所属した集団の名を記していないのはそのためであらう。

最後にTatarであるが、これは蒙古源流にBarsu boladの第五子BayandaraがチャハルのCayan Tatarを分封された、とあることからみて、やはりその一オトクであつたとみてよいであらう。ただ何故Cayan Tatarとせず、単にTatarとしたかと言へば、他にQara Tatarなる集団もあつたため⁽²⁰⁾、これらを総合してTatarとしたのであらう。

以上チャハルの左翼部について検討して来たが、ガンガイ⁽¹⁹⁾ン・ウルスハルの記すところは、他の史料によって、いずれもチャハルに所属したものであることが認められた。しかしこれでは左翼に五オトクあつたことになり、「四オトク」とは数があわなくなる。ここで注意されるのがAuganとNaimanの二集団である。実際これら二つの集団は、諸種の史料において併記されることが多く、また共同行動をとることが多いのである。例えば先のガンガイ⁽¹⁹⁾ン・ウルスハルの記事にしてもしかり、またアルタン・トプチにも「Dayan qayanの後裔は今この五〇ジャサクの中に」⁽²¹⁾「Baŋarin' 11 Jarud' Odqan (=Unganの誤り) Naiman' Kesigten…」と見える。更に滿文老檔、太

宗一、天聰元年二月二日の条に、

Cahar の Naiman の Hūng Baturu に送った書。「汝は Omdzat Cori Lama に、我等と修好したいと言った。誠に修好しようとするれば、Aohan の Dureng Secen Joriktu [と] Hūng Baturu が相談して、道理の解るよい者を遣わせ。汝等の言を見て相談しよう。

とあり、また同、太宗六、天聰元年六月一二日の条に、

出征して帰って来る時、都城に留守していた諸王は迎えの使を遣わし、「Cahar の Aohan と Naiman の諸王、国人が悉く叛いて来る」と言っていた。「中略」「叛いて来るのは本当である。旧遼陽の河に到着している。」と Aohan と Naiman の使者三人が十六日に報告に来た。

とあって、⁽²³⁾ こうした例は枚挙にいとまが無い。更に Dayan qaγan の子 Gere bolad が Augan と Naiman を分封された、という伝聞もこれに加わる。⁽²⁴⁾ 以上の例は結局のところ Augan と Naiman がもともと非常に緊密な関係にあったこと、つまりかつては一つのまとまった集団であったことを意味するのではないだろうか。すなわち、Augan と Naiman はそれらで一オトクを形成したのではなからうか。このように名称の異なる複数の集団が一オトクを形成したという例は他にもあり、⁽²⁵⁾ 従ってこの点は十分考えられることなのである。

なおモンゴル文年代記には以上検討したものの他にチャハルに所属するオトクとして、Dayan qaγan の父 Bayan mǫngke が生まれて、Esen tayisi の迫害を蒙ったというエピソードの中に、Bayan mǫngke の母 Sečeg biγi の家⁽²⁶⁾に働いていたという Urai emegen の所属するチャハルの Qulabad oγor の名が見える。⁽²⁷⁾ しかしこのオトクの

名はこのエピソードの中に一ヶ所見えるだけで、他には全く現われないものである。このエピソードそのものの真偽についてはかなり疑わしいが、チャハルが八オトクとして称された頃には、⁽²⁷⁾少なくともオトクとして存在しなかったことは事実であろう。また皇明九辺考、卷六、三関鎮の辺夷考に見える、チャハルに所属すると記された「ト爾報」なる集団についてもやはり不明である。明側の史料からもこの集団について、この他に具体的な記述は無くまた蒙文史料の中にもそれらしいものは見あたらない。或いは明人の誤記なのか、それとも諸子分封の際に分解してしまったのかもしれない。

いずれにせよ以上の考察からみて、明側に八大營として伝えられたいわゆるチャハル・八オトクとは、右翼が Üjümüčin, Qayučid, Kemijüüd, Sönid の四オトク、左翼が Alayčud, Angan, Naiman, Kesigten, Tatar の四オトクから成っていたのである。これらのうち、Ligdan qayan の時代に Üjümüčin, Qayučid, Sönid, Angan, Naiman, Kesigten 等はその支配を逃れて、外ハルハへ逃れるなり、或いは清朝（当時は後金国）に降って、その後それぞれ Jasaγ を与えられ、旗として残ったが、その他の Kemijüüd, Tatar は先の Alayčud のように壊滅させられたのか、後世に伝わっていない。

三、Dayan qayan の諸子分封とチャハル

いわゆるチャハル・八オトクというのは以上の通りであった。チャハル・トゥメンは周知のように、モンゴルの大ハーンが直接支配した集団であり、その内部集団に対する大ハーンの諸子分封の例は非常に多い。こうした分封

の事実を伝える史料の中でも、蒙古源流はその実体を伝えるものとして従来より高く評価されてきた。ところがこの点に関する蒙古源流の記事は検討すればする程不都合な点が多いのである。その一例として清朝の史料と比較してみよう。蒙古源流によれば Dayan qayan は Qayucid を第七子 Ar bolad に、また Aqan・Naiman を第八子 Gere bolad に分封したという⁽²⁸⁾。しかし清朝側の、例えば蒙古回部王公表伝、卷三五、浩齊特総伝は、

元太祖十六世孫図嚕博羅特、再伝至庫登汗、号其部曰浩齊特。

とし、Dayan qayan の子図嚕博羅特 (Toro bolad) を経て後者の孫にあたる庫登汗 (Daraysun gödeng qayan) に至ってその部を浩齊特 (Qayucid) と称したと伝える。また Aqan・Naiman について王公表伝、卷二六、敖漢部総伝は、

図嚕博羅特、子二、長博第阿喇克、詳烏珠穆沁部総伝、次納密克、生貝瑪土謝図、子二、長岱青杜楞、号所部曰敖漢。

と伝え、また同、卷二七、奈曼部総伝には、

元太祖嘗偕其弟哈布図哈薩爾、平奈曼部。詳見元史。太祖十六世孫、図嚕博羅特、三伝至額森偉徵諾顔、即以爲所部号。

と伝える。すなわち敖漢 (Aqan) 部は岱青杜楞 (Dayicing dorin) の代になって、また奈曼 (Naiman) 部は額森偉徵諾顔 (Esen üjeng noyan) の代になってそれぞれ所部の名称とした、というのである。つまり、Aqan も Naiman も蒙古源流の伝えるような Gere bolad とは全く異なる系統に継承されているのである。これらの矛盾に

ついで和田清氏は「Kesigenを分封された」幹齊爾博羅特の子孫は斯くの如く遺っているが、余の二子、格喀博羅特、阿爾博羅特の後は、間もなく本宗図嚕博羅特、博第汗父子、及びその児孫に取って代られたものとみえ、その部落敖漢、奈曼（格喀博羅特）及び浩齊特（阿爾博羅特）の尊系は既に異っている。」と述べられ、更に Qatuid⁽²⁹⁾ について「阿爾博羅特の後は跡なく消えて、その代りに達來孫庫登汗の子孫が之に代っている。」と説明されている。⁽³⁰⁾ しかしながら北虜世系によれば、蒙古源流にいう Dayan qayan の第六子 Ar bolad（阿爾博羅特）に比定される那力不頼の子孫は絶えるところかずと続いていることが知られるのである。従って和田氏のこの見解には大きな疑問を抱かざるを得ない。結局のところ蒙古源流を基本にして今まで知られていたような Dayan qayan の諸子分封について問題があったわけであるが、以下その点について検討をすすめる。

Dayan qayan の諸子分封はモンゴルの王侯、牧民にとっても重大な関心事で、どの年代記もそのことを伝えている。第一子の Törö bolad 第二子の Ulu bolad、更に Gereü tayiji (Garudi) はいずれも早く死に所領を与えられていないが、⁽³¹⁾ これらを除いた他の諸子分封について年代記の伝える記事と比較してみよう。まず第三子 Barsu bolad であるが、蒙古源流や蒙古世系譜は右翼三万戸を与えられたとするが、⁽³²⁾ アルタン・トブチ、ガンガイ・ウルスハル、アルタン・クルドゥン、ボロル・エリケ等はこの点を明確に伝えていない。しかしいずれも Barsu bolad が jinong になったことを伝えており、その意味からして彼が右翼部を与えられたことは間違いない。第四子 Arsu bolad はすべての年代記が Dolofan Tümed を分封されたと伝え、これも問題は無い。また第五子 Alcu bolad が五オトク・ハルハを、第六子 Veir bolad がチャハルの Kesigen をそれぞれ分封されたということもすべての年

代記で一致する。更に Gerezenje tayji (Jalayir qong tayji) が外ハルハ(七オトク・ハルハ)七ホシグ・ハルハ)を分封された、という点も同様である。しかし問題は残された他の三子の方封地である。第七子 Ar bolad (アルタン・トプチでは Albura) の分封地を蒙古源流、蒙古世系譜はチャハルの Qayucid とするのに対し⁽³³⁾、アルタン・トプチは Čayan Tatar とし⁽³⁴⁾、更にガンガイン・ウルスハル、アルタン・クルドゥン、ボロル・エリケは一致して Asud' Sarqud' Dari mingγan とする⁽³⁵⁾。また第八子 Gere bolad の分封地を蒙古源流、蒙古世系譜は Aujan' Naiman とするのに対し⁽³⁶⁾、アルタン・トプチは Gere bolad を Urud tayji とし⁽³⁷⁾、分封地を Urud とする。またガンガイン・ウルスハル、アルタン・クルドゥン、ボロル・エリケも Urud とする⁽³⁸⁾。最後に Ubasanja čing tayji とするが、蒙古源流、蒙古世系譜は Asud' Yöngsiyebu を分封された⁽³⁹⁾とするのに対しアルタン・トプチは Čing tayji とし⁽⁴⁰⁾、Qara Tatar を分封されたとする。またガンガイン・ウルスハル、アルタン・クルドゥン、ボロル・エリケはいずれも Tatar ayimaγ を分封されたと伝える⁽⁴¹⁾。このように年代記間には相違があり、特に蒙古源流とアルタン・トプチの記載に大きな差違が見られる。先の指摘を表にしてみよう。

(第一表)

Ubasanja čing tayji	Gere bolad (Urud tayji)	Ar bolad (Albura)	
Asud, Yöngsiyebu	Aujan, Naiman	Qayucid	蒙古源流, 蒙古世系譜
Qara Tatar	Urud	Čayan Tatar	アルタン・トプチ
Tatar ayimaγ	Urud	Asud, Sarqud, Dari mingγan	ガンガイン・ウルスハル, アルタン・クルドゥン, ボロル・エリケ

これらの相違は無視出来ないものであり、以下これについて検討する。

まず第六子 Ar bolad (Albura) の分封地であるが、これは表によっても分るように、年代記間で最も相違の激しいものである。Ar bolad は北虜世系でいうと那力不頼台吉にあたる。それによると、那力不頼には四子あり、長子失喇台吉、第二子那出台吉の所属する営名は哈不慎、第三子不克台吉のそれは委兀慎、第四子莫藍台吉の営名は打刺明安とする。ここに現われた営名のうち、哈不慎は管見の及ぶ限りにおいてはどのモンゴル文年代記にも見えないもので、従って如何なる集団に比定すべきか明らかではない。⁽⁴²⁾これに対し委兀慎はもちろん Ujirurcin に比定される。また打刺明安であるが、これは和田氏が指摘されているように籌邊纂議の歴代夷名宗派に見られる打喇明安官児にあたることは間違いないが、⁽⁴³⁾モンゴル文年代記では先に指摘したようにガンガイ・ウルスハル等に記される Dari mingyan に比定すべきである。⁽⁴⁴⁾この Dari mingyan が、満文老檔、太宗三六、天聰五年三月二日の条の蒙古八旗の各部酋が太宗より、綬、毛青その他を下賜されたという記事の中に見える「鑲白の Tarai minggan の Mangguldai Hošoci」「鑲紅の Tarai minggan の Burgadu」「正紅の Tarai minggan の Baitulā Cuhur」等々と記される⁽⁴⁵⁾Tarai minggan に相当するものは明らかであらう。従って、Dari mingyan の存在が裏付けされ、Ar bolad (Albura) の支配下に、恐らくは哈不慎、Ujirurcin と共に Dari mingyan があつたことは疑いない。なおセロイス氏が、北虜世系の打刺明安を Dalan mingyan と転写し、「私の知る限りにおいて、この氏族の名はどこにも証拠づけられない。」と述べている点や、⁽⁴⁶⁾また和田氏が Dalad mingyan に比定されているのも、⁽⁴⁷⁾いずれも誤りである。

さてガンガン・ウルスハル、アルタン・クルトゥン等に Ar bolad (albura) の分封地として Asud の名が見えるのが注意される。蒙古源流によれば Asud は Yongsiyebü と共に Ubasanja čing tayiji に与えられたもので、その後この集団は Barsu bolad の第六子 Bodidara odqan の奪うところとなったという。すなわちこの事件の経過は次のように述べられている。⁽⁵⁰⁾

Bodidara は甲戌の年（一五一四年）生れである。彼はその幼い時に「Aju と Sira の二人は互いに殺し合うがよい。Asud' Yongsiyebü の上に私がすわろう。」と歌い遊んで暮したのである。そのように Ubasanja čing tayiji の子 Aju と Sira との兄弟二人が殺し合う時、「Aju が自分の弟を殺した」と「その所領を」没収した。Sira は後裔なしに害されたことにより、「口の贈物 aman-u beleg である。」と言いつつ、Asud と Yongsiyebü の上に Bodidara をすわらせたのであった。

Bodidara が Asud と Yongsiyebü を領したのは事実で、北虜世系によると、永邵卜 (Yongsiyebü) は長子恩克跌児歹成台吉に継承され、また Asud はその第三子啞速火落赤把都児台吉、すなわち Nondara qolači noyan に継承されており、特に後者は Tümen jasar tu qayan より jasar を授けた一人にあげられている。⁽⁵¹⁾だが問題なのは蒙古源流が「Ubasanja čing tayiji の子、Aju と Sira」としている点である。すでに指摘したように北虜世系は、失喇、那出すなわち Sira' Aju の父を那力不頼台吉、すなわち Albura (Ar bolad) としている。この点はすでに和田氏も問題にされたところであるが、両者の相違について、「北虜世系によれば歹顔汗（達延汗）の第七子那力不頼が即ち烏巴徹察青台吉のようで、その子孫は永く張家口外の地に栄え、之に反して博第達喇鄂特罕台吉

の占領したのは北辺遙かの永謝布（永邵卜）の地だけだったようである。」と述べ、それ以上深く追求されなかった。しかしこれは蒙古源流の記事に惑わされた結果に他ならない。他の年代記を見ると、例えばアルタン・トプチは「Albura の子は Aju' Sira の二人、その後裔は Čayan Tatar のノヤンである。」とし、⁽⁵⁴⁾ またシラ・トゥージは北虜世系とは同じく「Dayan qayan の第七子は Ar buɣura tayij' の子は Aju tayij' Sira tayij' Böke tayij' Molon tayij' といふ、⁽⁵⁵⁾ 第八子は Al bura (Arbuɣura ~ Ar bolad) の子は Aju' Sira といふ。またシラ・トゥージは Dayan qayan の第八子 Čing tayij' といふは Ubasanja の子は Töngsi tayij' Čangli tayij' といふ、⁽⁵⁶⁾ またアルタン・トプチは Töngsi Čingli といふ。これは北虜世系の「称台吉の子通石台吉、長力台吉」とあるのに完全に符合する。以上のことからして、蒙古源流の記載は信用出来ず、結局その系譜は第六子 Albura (Ar bolad) の子は Aju' Sira といふ Ubasanja čing tayij' の子は Töngsi tayij' Čangli tayij' に修正せねばならぬのである。また Albura (Ar bolad) の分封地も恐らく蒙古源流の伝えるような Qayucid ではなく、最初は哈不慎 Asud' Dari mingʻan の他びあひつ、⁽⁵⁷⁾ 後には Bodidara 或いはその第三子 Nomdara qolaci にその一部を奪われたものであらう。また Ubasanja čing tayij' の分封地もやはり源流に伝えるような Asud' Yöngsiyebu ではなく、他の年代記に記される、チャハンの Tatar もしくは Qara Tatar だったと思われる。⁽⁵⁸⁾

ところで Ubasanja čing tayij' に関する北虜世系の記事について一言述べておきたい。北虜世系ではそれと覺しき人物を第十子に置いて、「五八山只台吉、子一、五班台吉」としている。第八子を「称台吉」とし、その子に通石台吉と長力台吉をあげていることは先にふれた。この点についてセロイス氏は、この五八山只こそ Ubasanja

であるとし、一方称台吉を第八子とあることから、Gere bolad に比定されている⁽⁵⁹⁾。しかしこれは甚だ粗略な論証であつて認めることは出来ない。その理由は、一つには Gere bolad が他の如何なる年代記にも Čing tayiji とは称されていないことである⁽⁶⁰⁾。第二にシラ・トゥージに、第九子として Čing tayiji、第十子として Gere bolad tayiji の名が見え、両者を明確に別人物としていることである⁽⁶¹⁾。第三にすでに見たように通石台吉、長力台吉は Ubasanja の子であつて Gere bolad の子ではないということである。以上の点から称台吉を Gere bolad にあてるとは正しくない。筆者はむしろこの点は北虜世系の著者のミス、或いは彼が引用した典拠の誤りとみ、本来一人である Ubasanja čing tayiji を Ubasanja (五八山只) と Čing tayiji (称台吉) の二人にしてしまったと考えている。その理由の一つには、五八山只、すなわち、Ubasanja の名を持ち、かつ Dayan qayan の子であるとすれば、名前の上からこれを Ubasanja čing tayiji 以外にあつては不可能であること。第二に Tongsi tayiji (通石台吉) も Čangli tayiji (長力台吉) も Ubasanja の子であつたこと。第三にすでにふれたようにアルタン・トプチ、シラ・トゥージに言う Čing tayiji と、蒙古源流に記される Ubasanja čing tayiji は明らかに同一人物であること。結局以上のような理由から北虜世系の称台吉と五八山只台吉は同一人物とみるべきで、二人とするのは誤りである。しからば翻つて北虜世系では Gere bolad がどうなっているかと言え、全く脱落させてしまったとみる他はない。

さてそれではこの Gere bolad の分封地であるが、すでに指摘したように蒙古源流等の Augan・Naiman 説と、アルタン・トプチ等の Urud 説がある。このうち蒙古源流の Augan・Naiman 説はすでに和田氏も指摘されてい

る通り、清朝史料の伝える両集團の始祖とは異なっているが、⁽⁶²⁾これは Gere bolad の子孫が絶えたためでは断じてない。実のところ Gere bolad が Augan・Naiman を分封されたという裏付は何も見つからないのである。一方 Urdu 説であるが、アルタン・トフチには興味ある記事がある。すなわち「[Dayan qayan の子] Urdu tayiji の後裔は Urdu の Lung noyan である。」⁽⁶³⁾というものである。⁽⁶⁴⁾この Urdu tayiji はもちろん蒙古源流に言う Gere bolad にあたるものであるが、その後裔の Lung noyan とはどのような人物であろうか。満文老檔、太祖四十、天命七年四月一日の条に、

Cahar・Kalka から来た諸王を集め、Han は役所に出て諸王に各自縁組をせよと委ねた。Han の姻戚は Jorikutu、Uljeitu、Coirjal、Garma、Sonom、Bobung。〔中略〕Duici Beile の姻戚は Urdu の七王の故 Lung Beile の一人の妻の子 Minggan、Minggan の三子 Angkun、Bandi、Dorji。〔中略〕これらは皆 Cahar の諸王で、Genggiyan Han は自分の子等によく養ってほしいとして、故意に姻戚と言ったのである。

という記載がある。⁽⁶⁵⁾ここに記されている「Urut の七王の故 Lung Beile」こそ先のアルタントフチの Urdu の Lung noyan にあたることは間違いない。「Urud の七王」とは、和田氏が、「これを察哈爾の誰に繫ぐべきかを知らない。」⁽⁶⁶⁾とされた登壇必究、卷三、「北胡夷酋号名义罕児宗派」の一派として記される、

初代五路、生七子。二代長子摺劳害等、二代次子把敗、二代三子呈吉兒、二代四子歹清、二代五子花台吉、二代六子炒花、二代七子宰桑谷。

の二代七子を指すのであり、Lung noyan とは恐らくその長子の摺劳害等にあたるとすべきである。Urud がチャ

ハルに所属する集団であったことは先の満文老檔や登壇必究の記事から明らかである。また彼らが Dayan qayran の後裔であったことは、アルタン・トプチに、

また Tayisun boʻrda ejen (≡清・太宗) に従い頼って下った Dayan qayran の後裔の中に、また Urud⁽⁶⁷⁾ Jarud⁽⁶⁷⁾ Qaracin⁽⁶⁷⁾ Kesigten⁽⁶⁷⁾ Çağar⁽⁶⁷⁾ これらの類の人衆は総じて多い。

とあることからしても裏付けられる。但し Urud は前章で指摘した、いわゆるチャハル・ハオトクの中には数えられていない。Urud は清朝に降ったもののジャサク Jasaq を与えられ旗に編成されていないが、或いはそれが何らかの事情を反映するのであろうか。或いはむしろチャハルの中で、独立した特別な位地にあったと考えるべきであろうか。しかし結局のところ以上の考察により Gere bolad が蒙古源流の言うような Angan・Naiman を分封されたのではなく、実は Urud を分封されたのである。⁽⁶⁸⁾

以上モンゴル年代記に伝えられる Dayan qayran の諸子分封について検討を試みて来たが、くい違いのあるもののうち Ar bolad (Albura) は Asud その他 Ubasanja は Qara Tatar を、Gere bolad は Urud を分封されたことを述べた。これを表にすると次のようになる。

(第二表)

Toró bolad	
—Ulus bolad.....	X
—Barsu bolad.....	Barayun ʔurpan tümen
—Arsu bolad.....	Doloyan Tümed
Dayan qayran—Aicu bolad.....	5 otol Qalq-a

チャハル・ハオトクとその分封について 森川

—Vair bolad.....	Kesigten
—Ar bolad (Albura).....	Asud, Dari mingʻran
—Gere bolad.....	Urud
—Geresenʻe.....	7 qosiʻyu Qalq-a
—Ubasanʻa čing tayijʻi.....	Qara Tatar
—Geretiʻi tayijʻi (Garudi).....	X

Dayan qatʻan の諸子分封がほぼ前表の如くであったとすると、チャハルに所属するオトクのいくつかに関する分封が問題となろう。まずその左翼部についてみよう。Augan・Naiman についていうと事實は先に引用した王公表伝、卷二六、散漢部総伝、卷二七、奈曼部総伝に伝える通りであらうと思う。但しこれに若干説明をつけ加えねばならない。ガンガイン・ウルスハルには Augan・Naiman について次のように記されている⁽²⁶⁾。

Ugan (Augan)ʻ Naiman の一族。[Bodi] alay qatʻan の弟 Nemeg noyan ʻ Uganʻ Naimanʻ Alayčid のダルガ daruʻa となつた。その子に Boyima tayijʻi ʻ ʻ ʻ Dočang duragal noyanʻ Ešen üjeng noyan ʻ ʻ Duragal noyan の子 Dayčing dūreng [杜陵]ʻ Ešen üjeng noyan の子 Güncin darqan vang [杜陵] Ugan・Naiman のノヤンたふぢらふである。

この二語は Nemeg noyan とは北虜世系の世密力合古⁽²⁷⁾ また Boyima tayijʻi は畢麻合古⁽²⁸⁾である。後者の子 Dočangʻ (Dayčing) tayijʻi (岱青杜楞)ʻ Ešen üjeng noyan (額森偉微諾顔)がそれぞれ Augan・Naiman を支配したわけであるが、このガンガイン・ウルスハルの記事で注意されるのは Alayčid となつた Alayčud である。前章でも指摘したようにこれはチャハル・左翼部に所属する一オトクであったが、Dayan qatʻan の後裔として誰

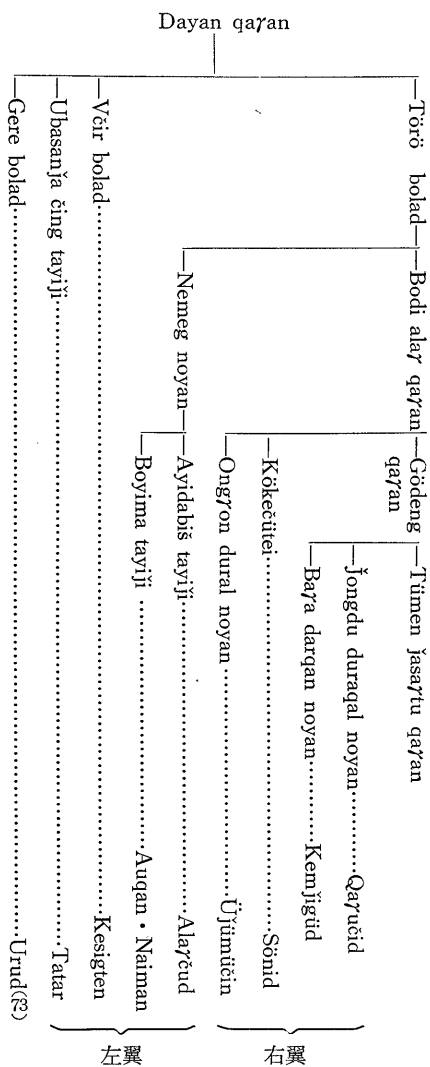
がこれを最初に領したのか、モンゴル年代記には記されていない。しかし先のガンガイ・ウルスハルと北虜世系の記すところによってほぼ判明する。ガンガイ・ウルスハルには記載が無いが、北虜世系は也密力台吉(Nemeg noyan)の子として畢麻台吉の他に捺大筆失台吉(Ayidabış tayji?)の名をあげている。更に捺大筆失台吉の子として那木台黄台吉の名があげられている。那木台黄台吉とは有名なチャハルの Amutai(Namutai) gong tayji であつて、Tumen Jasaγru qayγan よりジャサクを受けた実力者の一人であつた。⁽²²⁾ガンガイ・ウルスハルがAlayčudの支配者の系譜を載せなかったのは、前章で述べたようにこれが後金国と抗争して壊滅させられてしまつたからである。しかしその集団の規模からして、実力者 Amutai gong tayji の根拠地としてふさわしい。捺大筆失の名はモンゴル年代記には見えないが、登壇必究、卷二三、北虜各支宗派の北胡夷酋号名义罕児宗派に「璽塔必」として記され、その存在は間違いない。つまり捺大筆失台吉が Alayčud の始祖なのである。以上をまとめると、Toro bolad の次子 Nemeg noyan は Alayčud・Augan・Naiman を含む集団を与えられたが、その長子の捺大筆失台吉(Ayidabış?)が Alayčud を、次子 Boyima tayji が Augan・Naiman を分封されそれぞれが各オトクの始祖となつたのである。このうち後者は更にその二子の Dayicing tayji、Esen üjeng noyan に分封されたのであつた。

一方チャハルの右翼部に対する分封についてみると殆んどは王公表伝の伝える通りであらう。例えば Sönd' Üjümčin はそれぞれ Darayisun gödeng qayγan の弟の Kökečütei(庫克齊圖墨爾根台吉)と Ongγon dural noyan(翁袞都喇爾台吉)を始祖とする。これは他のモンゴル年代記の記すところとも一致する。但し Qayγucid

(浩齊特)について、王公表伝は「至庫登汗 (Darayisun gödeng qaγan)」、号其部曰浩齊特」と記しているが、これは不正確で、多くの年代記例えばシラ・トゥーシに記されるように (Шара Турун, стр. 77) Darayisun qaγan の次子 Jöngdu duragat noyan を始祖とすべきである。最後に Kemjigüd であるが、これは前章で若干ふれた通り、シラ・トゥーシに記される如く、Darayisun qaγan の第三子 Baya dargan noyan を始祖としたと考えるべきである。Kemjigüd はチャハルの右翼部内の他のオトクと異って、清朝治下に集団としてその名を見ない。その理由は不明であるが、或いは Alaycud のようにいずれかの時に壊滅させられたのであろうか。

以上チャハル・トゥメン内のオトクに対する分封について簡単にまとめたが、多くは王公表伝の伝えるところを採るべきであろう。しかし若干の、特に清朝治下にはすでに存続せず、その支配以前に何らかの形で消滅してしまった集団についてはやはり多くのモンゴル文史料が検討の材料を提供している。なお興味あることは、チャハルの左翼部には Tatar Kesigten Naiman など、モンゴル帝国より、元朝時代にかけて名の知られたかつての大部族が多く見られるのに対し、右翼部には Sönd など、その他はそれが見られないことである。またチャハル内の Dayan qaγan の子孫に対する分封は何よりもまず最初にその左翼部を対象に行なわれ、ハーンの根拠地である右翼部に対してはかなり後になっている。この点はモンゴルの諸王の分封の性格を考える上で注目に値するが、その検討は別の機会にしたい。チャハル内の諸オトクの分封を簡単に表にまとめると以下の通りである。

(第三表)



四、チャハルのオトク以下の小集団に対する分封

以上は主としてチャハルを構成するオトクに対する分封の実態を眺めてみたわけであるが、これらのオトクは世代が下るにつれて更に細かく分封されていた。以下この点を少し検討してみたい。ただ残念ながらこの点については必ずしも十分な史料が伝えられていない。検討出来るのは極く一部の集団である。

一部の年代記によると *Bodi alay qaγan* の子供に対する分封は前章の表で見られるよりはもっと複雑であった

らしい。蒙古源流は Bodi alay qayan の子や Darayisun gödeng qayan' Kökeütei' Ongyon tayij の三人をあげているが、これだけではなかった。北虜世系では Bodi alay (不地台吉) の子を打来素台吉' 可出大台吉' 汪元都刺台吉、公兔台吉、那賓兔台吉の五人としている。多くのモンゴル年代記も同様である。例えばガンガイン・ウルスハルにも Bodi alay の子として Darayisun の他に⁽⁷⁴⁾ Kökeütei mergen noyan' Ongyon dural noyan' Nomtu' Kündü と全語で五人記している。⁽⁷⁵⁾ フルタン・クルルヤンには⁽⁷⁶⁾ Darayisun qayan' Kökeütei' Ongyon dural が Čařařang nang nang tayiq たり主⁽⁷⁷⁾ Nomtu' Kündü と Qatun jönggen たり生⁽⁷⁸⁾まれた、と記されている。すなわち北虜世系の打来素台吉は言うまでもなく Darayisun gödeng qayan にあたり、また可出大台吉は Kökeütei に、汪元都刺台吉は Ongyon dural noyan に、公兔台吉は Kündü に、那賓兔台吉は Nomtu にあたる。従って Bodi alay に五子あったことは間違いない。北虜世系とガンガイン・ウルスハルでは第四子と第五子とが入れ代っているが大した問題ではない。さてガンガイン・ウルスハルはこれら五子のうち Darayisun qayan を除く他の四子の分封地を次のように伝える⁽⁷⁹⁾。

Sönid 〇 noyan 〇一族 Gödeng qayan 〇次弟 Kökeütei mergen noyan 〇第四子⁽⁸⁰⁾ Dabagai qosiyüei' Bayan noyan' Čarudai noyan 〇⁽⁸¹⁾ [中略] Sönid 〇 noyad 〇⁽⁸²⁾ [中略] Barayun Üjümüin 〇 noyan 〇一族 Gödeng qayan 〇第三弟 Ongyon dural noyan 〇⁽⁸³⁾ Üjümüin' Erkiğüd 〇⁽⁸⁴⁾ 〇を支配した。その子は六人。Irekü bařatur noyan' Bayisai bingü noyan' Bayasqal erdeni qosiyüei' 後裔なり。Nayantai yeldeng noyan' Janggi darqan noyan' Dorji sečen jingong 〇⁽⁸⁵⁾ [中略] Bayisai

bingtü noyan の後継は Barayun Üjümücin' goyar Luusācin の ayımar の noyan や ㄱㄴᄂᆞᆫ Üjümücin の noyan の一族は Yeldeng noyan の後継は Sirqud の noyan ㄱᄃᆞᆫ dargan noyan の後継は Töbed の noyan ㄱᄃᆞᆫ Qoşoi cın vang ㄱᄃᆞᆫ Mongrol の後継は jinong ㄱᄃᆞᆫ ㄱᄃᆞᆫ Dorji の子 ㄱᄃᆞᆫ Šabtan qan' Mergen cögegür noyan' Cöyisengge' Aćtu qong tayiji' Cöngqu tayiji' Čeken tayiji ㄱᄃᆞᆫ Jinong sečen cın vang ㄱᄃᆞᆫ Aćtu qong tayiji' ㄱᄃᆞᆫ 彼の族系 Sečen cın vang Čayran babai ㄱᄃᆞᆫ [中略] Üjümücin の noyan ㄱᄃᆞᆫ [中略] [Gödeng qayran の] 第四' 第五族 Nomtu' Küngdü ㄱᄃᆞᆫ Telenggüs' Sibayucın を支配した。

これを簡単にして表に書くゝ Bodi alay qayran の五十二族は右のようになる。

(第四表)

	—Darayisun gödeng qayran
	—Kökečütei mergen noyanSönid
Bodi alay qayran—	—Ongron dural noyanÜjümücin' Erkegüd' Luusācin
	—Nomtu.....Telenggüs
	—KüngdüSibayucın

このうち Kökečütei の Sönid' Ongron dural の Üjümücin 以外の分封地については興味深い。Erkegüd は元代のネストリウス派キリスト教徒を指す也里可温と関係があるのだろう。モステールト師によれば、オールドスにおいては「er^hxüt」という語は現在そのメンバーが、ラマ教やシャーマニズムとは異った、中世のキリスト教につな

がる特別な儀礼を守る、氏族の名を表わす。」という⁽⁸⁷⁾。従つてこの場合もそれと何らかの関係があるのだろう。また Luusačin とはどういう性格の集団かは不明であるが、シラ・トゥージやアルタン・クルドゥンには Qasar に分封された集団の一つとしてその名が見える⁽⁸⁸⁾。Nomtu の分封地 Telenggis はやはり元朝秘史にも見られる帖良古惕 Telengüt につながるものであろう⁽⁸⁹⁾。また Kungdü の分封地 Sibaŋučin はオルドスに所属する同名のもの⁽⁹⁰⁾と同系別派であろう。さう Sonid' Üjümüčin がオトクとして名を連ねているのに対し、その他の集団がオトクに数えられていないことであるが、一つには Sonid' Üjümüčin 等は他に比して大きな集団であったのだろう。またそれらを分封された Kökečütei' Ongŋon dural は Darayisun qaŋan と共に Bodi alay の正妃 Čaŋaŋang nang nang tayiqu から生まれたことも何らかの理由となっているのだろうか。

さてオトクは更に細かく分封された。アルタン・クルドゥンは Üjümüčin の例を次のように伝える⁽⁹¹⁾。

Bodi alay qaŋan の第三子 Ongŋon dural noyan なし Üjümüčin' Erkegüd' Laušačin を支配した。Ongŋon dural の子には Irekü batur' Bayisai bingü' Bayisal erdeni' 後裔なり。Nayantai yeldeng' Jänggi dargan' Dorji sečen jinong である。〔中略〕Irekü batur の後裔は左翼の Baŋa Üjümüčin を支配したノヤンである。Bayisai bingü' の後裔は右翼 Üjümüčin の Laušačin のノヤンである。Nayantai yeldeng' の後裔は Sarqud' のノヤンである。Jänggi dargan の後裔は Töbed' のノヤンである。〔中略〕Bayisai dorji sečen jinong らの後裔は右翼 Üjümüčin を支配したノヤンである。

ここに引用した記事と先のガンガイン・ウルスハルの記事とを突き合わせてみると、Üjümüčin otör 内の集団構

成、ならびにその分封形態がよく分る。アルタン・クルドゥンに記される「Üjümčün」というのは恐らくÜjümčünの右翼、左翼のことで、清朝治下に入って旗に編成された時、左・右二旗に編成されたことを指しているのだろう。Ongʻon duralの諸子分封は伝えるところからしてÜjümčünの左・右両翼という区分を軸として行なわれたことが知られる。なおLašācin~LušācinがÜjümčünの右翼に属していたことは引用した記事から明らかであるが、他のSargudʻ Töbedに関しては明確ではない。しかし先のガンガイ・ウルスハルの記事によりÜjümčün otoyに含まれていたことは間違いない。むしろその書き方からして、その左翼に所属していたような印象をうける。少なくとも左・右翼から独立した位置にあったとは考えられない。⁽⁹⁸⁾ Sönd otoy内における分封の例はその参考になる。ボロル・エリケにはまずSönd左翼について次のように記されている。⁽⁹⁹⁾

Bodi alay qayʻan の第¹¹ 旗 Kökečütei mergen 々々 Burqai ügürʻ Boyla jorɣtuʻ Buyanɣuli mergen dayicingʻ Buyandara sečen の第¹² 旗 Burqai ügür 々々 Dabqai qosɣučiʻ Dabqai qosɣuči からは左翼 Sönd のホニン¹の jasay の yang Tenggis mergenʻ yang Tenggistei üjeng dayurisquʻ Qondur sečen noyanʻ Mangɣatai qara gulaʻ Beki baturʻ Bamba qatayayiči の¹³ 旗 Tenggis mergen yang 々々 yang Samatɣiʻ 中¹⁴ 旗 々々 Longqočil の¹⁵ 旗 Tenggistei üjeng dayurisqu 々々 Beile bomboʻ 中¹⁶ 旗 々々 Šara uruɣʻ の¹⁷ 旗 々々 Qondur sečen noyan の¹⁸ 旗 Rinčen tayiji 々々 々々 Qara dürüdeng の¹⁹ 旗 Mangɣatai qara gula の²⁰ 旗 Jäkirɣäi damba 々々 々々 Bordomal の²¹ 旗 Beki batur の²² 旗 Bombasi 々々 々々

らは Uyirurcin のノヤンである。これらはすべて左翼 Sönd のホシグンに座した。第六子 Bamba qata'yayici は後裔なし。

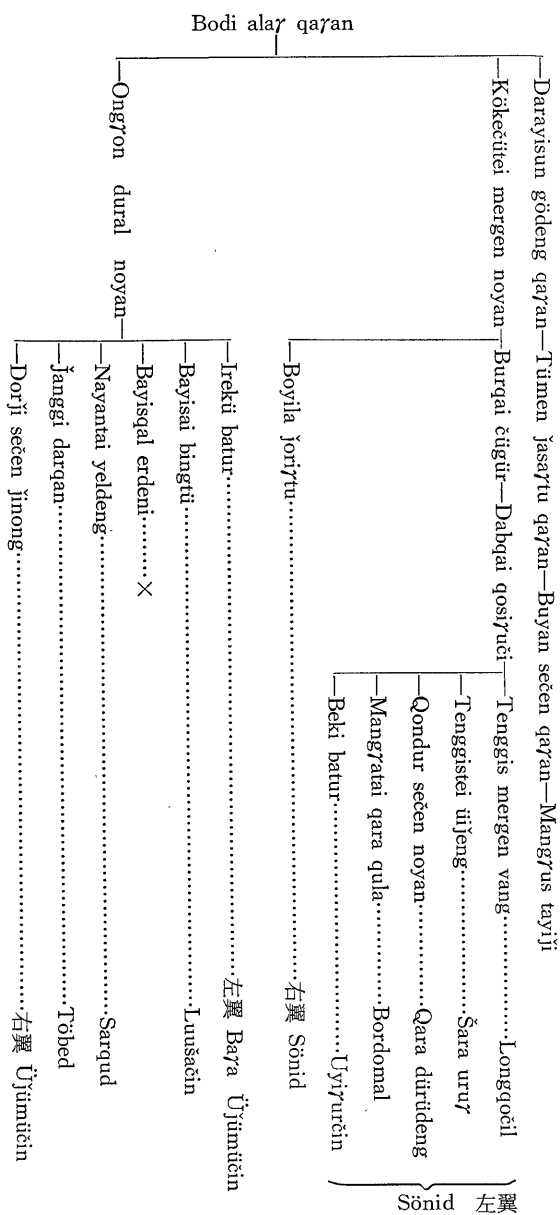
また Sönd 右翼についてボロル・エリケは

Kökeütei mergen の第二子 Boyla jorjtu より右翼 Sönd のホシグンのシャサクの Dügüreng geyün vang Susa' [中略] これらはすべて右翼 Sönd のノヤンである。

(28) と記すが、資料が無かったのか、右翼 Sönd が更に如何なる小集団に分れ、かつどのように分封されたかを記していない。しかしともかくも Kökeütei が Sönd otor を分封され、次にその子 Burgai ügür Boyla jorjtu がそれぞれその左翼、右翼部を与えられ、更にその諸子が Sönd の左翼、右翼を構成する小集団の長となったことが知られるのである。先の Üjümücin otor の場合も恐らくはこのようではなかったかと思われる。この点はその他のオトクにおいても同様であったと思われるが、伝える史料が無いのを遺憾とする。以上検討した Üjümücin Sönd 内の各集団の分封の過程をまとめて表にすると次のようになる。(第五表)

他のオトクについては今のところ伝えるものは無いが、極く一部であるにしてもここに指摘したことは、またオトクの性格を検討する上でも重要な意味を持つものである。その詳細な検討は別稿にゆずるが、チャハルのオトクの考察より判明したいくつかの点をあげておこう。一つはオトクそのものが、非常に多くの、すなわち古くから名を知られたものや、或いは新たに編成され名を得たと思われる小集団から成っていた、ということである。またオトクもトゥメンと同様に左・右翼に分れていたことも明らかである。第一の点は一目瞭然で、それ以上の説明を要

(第五表)



さない。第二の点についてはやはり引用した通りであるが、ただこれらの引用史料が比較的新しいということについては、或いは問題とされるかもしれない。すでにふれた通り、それらが成立した時はいずれも清朝の支配下に入り、集団としての再編成を蒙ってから、かなりの年月が経っているからである。しかし以下のような記事もあるこ

とを指摘しておこう。すなわち大清太宗実録、天命一一年一〇月己酉（一〇日）の条に、

上命大貝勒代善、阿敏、貝勒德格類、濟爾哈朗、阿濟格、岳託、薩哈廉、豪格等、率精銳万人、往征蒙古哈爾哈札魯特部落。并遣書、声其罪。其書曰、「中略」於甲子年（天命八年、一六二四年）、爾札魯特、右翼、襲我使於漢察喇地方。「中略」丙寅年（天命一〇年、一六二六年）、爾札魯特、左翼、諸貝勒、覬我使臣之出、屢次要截道路、劫奪財畜、並行殘害、云々。

とある。札魯特とは勿論内ハルハ・五オトクの一〇 Jarud である。この事件が起きたのは天命八、一〇年のことであるから清朝に服属する以前に、「札魯特右翼」「札魯特左翼」と記されるように、左右両翼に分れていたのである。つまりガンガイ・ウルスハル等の記事も、清朝治下に入り再編成される以前の状態を伝えたものと解釈し得るのである。より拡大して考えると、清朝治下におけるモンゴルの集団の、「旗」の編成も、モンゴルの諸集団の構造をあまり変えたものではなく、従来の体制をそのまま継承したものとみることが出来る。この点も別稿で詳しく論ずるつもりである。

五、おわりに

以上一六～一七世紀のチャハル・トゥメンについて、いわゆるその八オトクの構成、その分封過程、更にはオトク内部の集団構成と分封について検討してきた。八オトクの構成については右翼部が Qaɣuɪd'Kemjigūd'Sōnid' Ujūnūčim の四オトクから成り、左翼部は Alaɣuɪd' Augan' Naiman' Kesigren' Tatar の四オトクから成って

いたことを述べた。なお Gere bolad の分封された Urud はチャハル・トゥメンに所属したことは確実であるが、左、右いずれに所属したか、伝えられていない。但し先の図表よりすると左翼部に所属した可能性が大である。チャハルの右翼四オトク⁽⁸⁷⁾の創設は表からみてもかなり遅いことが分るが、このことはかつて筆者が「中期モンゴルのトゥメンについて」において、トゥメンがそれに所属するオトクの数を付して呼ばれる現象がかなり後で起きたもの⁽⁸⁸⁾と推定したことを裏付けるものである。

チャハルの諸オトクは次々とダヤン・ハーンの子孫の間に分封されていったが、諸文献の間にかなりの相違があることを指摘した。それは大きく分けて蒙古源流の系統と、アルタン・トプチ、ガンガイン・ウルスハル、アルタン・クルドゥンの系統になるが、結局のところ蒙古源流の伝えるものに大きな欠陥があることを述べた。蒙古源流の著者の利用した資料が不確なものであったためだろうか。ともかく蒙古源流の伝えるもののうち、Ar bolad (Al-bura) の分封地 Qayucid は Asud' Dari mingyan 等に、Gere bolad の分封地 Augan・Naiman は Urud に、更に Ubasanja cing tayiji の分封地 Asud' Yongsiebu は Tatar にそれぞれ訂正すべきであると指摘した。

こうしたオトクは世代が下るにつれて更に小さく分封されていった。残されている資料はほんの僅かで、その事例を多くあげることが出来なかったが、ともかくオトクは実に多くの小集団から成っており、それらに Dayan qayan の後裔が分封されたのである。また遊牧集団の間に貫かれる左、右二翼の分割原理はオトクにおいても同様であり、いわゆる諸子分封もそれを軸に行なわれたのであった。

チャハル・トゥメンの集団構成がほぼ明らかになったことで、ハルハ、オルドス、トゥメトと併せ、中期モンゴ

ル、それも一六世紀後半以降のモンゴルの重要な集団が如何なる構成をしていたか大体明らかになった。このことは再びトゥメンの問題を検討する材料を与えてくれたが、それにもまして、この時代の基本集団の一つであるオトクについて検討する材料を提供している。この点は別稿で論ずるつもりである。

註

- (1) 森川「ハルハ・トゥメンとその成立について」『東洋学報』五五—二、同「オルドス・十二オトク考」『東洋史研究』三三—三。
- (2) 和田、前掲書、四八四—七頁。
- (3) 森川「中期モンゴルのトゥメンについて」『史学雑誌』八一—一、四五頁。
- (4) 熊廷弼『經遠書讀』卷七、「与周輔陽中丞」己未年(万曆四十七年)十一月二十七日の条他。
- (5) Пучковский (пер.), Томоуджаб, Ганга-йин Урухал Москва, 1960, текст, стр. 55-6.
- (6) W. Heissig (ed.), Siregetü Guosi Dharma; Altan Kirdün Ming'an Gegesüiti Bičig, Kopenhagen, 1958, vol. VI, 2-v.
- (7) 森川「中期モンゴルのトゥメンについて」四〇頁。
- (8) アルタン・クルドワンがこれを左翼所屬としてゐる点については前掲論文参照。

(九州大学教養部助教授)

- (9) E. Haenisch (ed.), Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagan (alias Sanang Secen), Berlin, 1955, 68-v. (以下ウルガ本と略称°) Če. Nasunbaljur (ed.), Sagan seen: Erdem-yin Tobči, Ulanbator, 1958, p. 222. (以下校訂本と略称°)
- (10) Rev. A. Mostaert & F. W. Cleaves (ed.) blo bzau bsTan 'jin: Altan Tobči, A Brief History of the Mongols, Cambridge, 1952, vol. II, p. 151(以下Altan Tobči Nova と略称°) ウルガ本、59-v, 64-v, 83-v, 校訂本、一九二—二一〇、二二八頁。
- (11) Н. П. Шастина (пер.), Шапа Тулку, Монгольская летопись XVII века, М.-Л., 1957, стр. 77
- (12) ウルガ本、83-v、校訂本、二二八頁。
- (13) ウルガ本、68-v、校訂本、二二二頁。
- (14) ウルガ本、55-v, 61-v 校訂本、一七七—一九九頁。
- (15) Altan Tobči Nova II, pp. 136, 161, 162, 172, 179.
- (16) ただし Alayčud 出自の者がこれらの年代記に如何な

- るチビシートに現われるかといふこと、(1) *Tayisun qayan* の時代に、*Tayisun qayan* とその弟 *Agbarji jingong* との間不和の原因を作ったのが *Alayčud* の *Čayan* といふ者であつたこと(ウルガ本、55-v、校訂本、p. 177) (2) *Manduyuli qayan* の妃 *Mandugui sayin gatum* がその後 *Dayan qayan* に再嫁する際に助言を与えた者の一人が *Alayčud* の *Salai duyulang* であつたこと(Altan Tobci Nova II p. 161) (3) *Dayan qayan* の右翼三万戸討征の際、*Dalan terigin* の戦鬪の吉凶を占ひた一人は *Alayčud* の *Čayan jayarin* なる者が見えぬ(Altan Tobci Nova II, p. 172) 等であるが、これらからして *Alayčud* 独自の者がハーンと非常に近い所で活動してゐたことが分る。
- (16) 満文老檔研究会訳註、『満文老檔』IV、太宗一、九九頁。

- (17) 同、一〇八頁。
 (18) 同、一二三頁。
 (19) ウルガ本、68-v、校訂本、二二三頁。
 (20) Altan Tobci Nova II, p. 189 に *Dayan qayan* の十の『Čing tayiji』の後裔は *Qara Tatar* のハーンといふる。』といふ。この点は後章で詳述する。
 (21) *ibid.*, II, p. 189.
 (22) 『満文老檔』IV、太宗一、一二頁。

チャハル・ハオトクとその分封について 森川

- (23) 同、八四頁。
 (24) ウルガ本、68-v、校訂本、二二三頁。
 (25) 森川「オールドス・十二オトク考」。
 (26) Altan Tobci Nova II, p. 157、ウルガ本、58-v、校訂本、一八七頁。
 (27) 森川「中期モンゴルのトゥメンについて」四〇～一頁。
 (28) ウルガ本、68-v、校訂本、二二三頁。
 (29) 和田、前掲書、五二八頁。
 (30) 同、五二九頁。
 (31) なお *Ulus bolod* に関しては右翼三万戸を管轄するジノンに任せられたが間もなくイブラヒムに倒されたことは周知の事実である。
 (32) ウルガ本、68-v、校訂本、二二三頁。
 W. Heisig & C.R. Bawden (ed.), *Mongγol Borjigid Obor-un Teike*, Wiesbaden, 1957, vol. III, 5-v.
 (33) ウルガ本、68-v、校訂本、二二三頁。
Mongγol Borjigid Obor-un Teike, vol. III, 5-v.
 (34) Altan Tobci Nova II, p. 189.
 (35) *Tamγan yuyexai*, *tecer*, 46-a. Altan Kirdün *Mingγan Gegesütü Bičig*, IV, 15-r, Rev. A. Mostaert & F.W. Cleaves (ed.), *Bolor Erike*, *Mongolian chrono-*

- nicie by Rasipunsuy, Cambridge, 1956, part III, p. 475-a.
- (39) ウルガ本^{68-v} 校訂本^{二二三三頁}
Mongrol Borjigid Obor-un Teike, vol. III, 6-r.
- (40) Altan Tobci Nova II, p. 189.
- (41) Танга-йин Урухад, текст, 46-6, Altan Kürdin Mingran Gegesitü Biciq, IV, 15-V. Bolor Erike, Part III, p. 475-b.
- (42) ウルガ本^{68-v} 校訂本^{二二三三頁}
Mongrol Borjigid Obor-un Teike, vol. III, 6-r.
- (43) Altan Tobci Nova II, p. 189.
- (44) Танга-йин Урухад, текст, 46-6. Altan Kürdin Mingran Gegesitü Biciq, IV, 15-v, Bolor Erike, Part III, p. 475-a.
- (45) ヤロース氏^{不明} H. Serruys, Genealogical Tables of the Descendants of Dayan-qan, The Hague, 1968, p. 153.
- (46) 和田^{前掲書} 六十四頁。
- (47) Танга-йин Урухад, текст, 46-a.
- (48) 『滿文老檔』VI^{太宗} 四八七頁。
- (49) H. Serruys, op. cit., p. 156.
- (50) 和田^{前掲書} 素引一七頁左。
- (51) モンゴル史料に於て Dari mingran とあるが、滿文老檔

- ① Tari mingran^{明側史料の打頼明安からするところ} 或いは Dari mingran とすべきかも知れない。
- (49) ウルガ本^{68-v} 校訂本^{二二三三頁}。
- (50) ウルガ本^{69-r} 校訂本^{二二三三頁}。
- (51) 和田^{前掲書} 六七五頁。
- (52) この部分をどう扱うわけか、ウルガ本は欠落しているが(67-v) 内府抄本その他は明確に「Asud の Nomdara qolaci noyan」を Tümen yasaytu qazan へらシヤナを委ひするに記せられている。(E. Haenisch (ed.), Qad-un Ündüsün-ü Erdeni-yin Tobciya, Wiesbaden, 1966, p. 412.)
- (53) 和田^{前掲書} 六七一頁。
- (54) Altan Tobci Nova II, p. 189.
- (55) Шапа Түжү, стр. 83.
- (56) Там же, стр. 183.
- (57) Altan Tobci Nova II, p. 189.
- (58) 名谷アルタン・エトチド「Albura のちび Ajur Sira 一人。その後裔は Çayan Tatar のヘヤンといふなり」(Nova II, p. 189)に記せられている問題は、Çayan Tatar については蒙古源流(ウルガ本^{68-v} 校訂本^{二二三三頁})にカンガイン・ウルスナル(текст, 44-a) アルタン・クルシタン (IV, 8-v) 等のモンゴル年代記になすべし Barsu

bolad jünong の第五子 Bayandara に与えられた集団であり、同じアルタン・トプチも別に Bayandara の分封地として *Caŋan Tatar* をあやづいてゐる (Nova II, p. 189) 北虜世系などによつても Bayandara (那林台吉) の系統が絶えたとは思われず、従つてこの点はアルタン・トプチの誤記と見るべきである。

(65) H. Serruys, op. cit., p. 152.

(66) 但しホルン・ホリケには *cing vang Gere bolad* と見えて (Bolor Erike, part III, p. 475-a) しかう *cing vang* は親王の意で *Cing tayij* とは全く意味が異なる。またこれは後世になつて加えられたものと思ふ。

(67) *Шара Түркү*, стр. 83.

(68) 和田、前掲書、五二八～九頁。

(69) Altan Tobci Nova II, p. 189 など同史料は Lung noyan を「Urad」所屬とせしが「Urad」の誤記である。

(70) シラ・ターシとせ「Gere bolad の子 Lung tayij」にあつて (*Шара Түркү*, стр. 83) 誤れを裏付た。

(71) 『満文老檔』II、太祖、五九一頁。

(72) 和田、前掲書、五七一頁。

(73) Altan Tobci Nova II, p. 190.

(74) この意味から拙稿「中期モンゴルのトゥメンについて」の中で、王公表伝の記載を誤りとして「Gere bolad に嗣子

がなく、その後何らかの過程を経て」Torö bolad の曾孫の岱青杜楞と額森偉徴諸顔の支配下に入つたとしたのは (四〇頁) 誤りとせねばならない。

(75) *Үанра-йин Үрүхат*, текст, 43-6.

(76) この人物の名称に関する考証は H. Serruys, op. cit., p. 29 参照。なおセロイス氏は蒙古遊牧記、卷三、散漢の項に、これにあたるものとして「納密克」と記されていることから、この人物の名を Namir としたが、ガンガイン

・ウルスハルの方に従つた。

(77) H. Serruys, p. 29.

(78) ウルガ本、67、校訂本、二二〇頁。

(79) 或いは Urad もこのように表にしてみると左翼部に属したのかもしれない。

(80) ウルガ本、67、校訂本、二一九頁。

(81) *Үанра-йин Үрүхат*, текст 42-a～43-a.

(82) Altan Kirdin Mingyan Gegesitiü Biig. vol. III, 22-v～23-r. などアルタン・クルトゥンはこの *Caŋaŋang nang nang tayiqu* を Bodi alay qayan の妃と記すが、蒙古源流は同妃をその母として記す (ウルガ本、66、校訂本、二一六頁)。今にわかにそのどちらかの正誤を決め難いが、或いは前者の方が正しいのかも知れない。

(83) *Үанра-йин Үрүхат*, текст, 42-a～43-6.

- (78) 原文は五人とあるが六人の名が記われている。
- (79) A. Mostaert, Les Erkut, descendants des chrétiens médiévaux chez les Mongols Ordos, *Ordosica* (Reprint from Bulletin of Catholic University of Peking, No. 9, 1934).
- (80) Illapa Tyamu, crp. 96, Altan Kürdün Mingγan Gegesüü Biig, vol. II, 7-r.
- (81) 『成吉思汗実録』東京一九四三、二九五頁。
- (82) 森川「オルダス・十二オトク考」三六頁。
- (83) Altan Kürdün Mingγan Gegesüü Biig, vol. IV, p. 3-r.

- (84) ボロル・エリケはこれを Tabid とする。(part III, p. 447-a)
- (85) その他 Ongγon dural の分封地に Erkegid の名が見えるのに、その子の分封地に見ることが出来ない。理由は不明で後考を俟つ。
- (86) Bolor Erke, part III, pp. 445-b~446-a.
- (87) ibid., part III, p. 446-b.
- (88) 『史学雑誌』八一、四〇頁。
- (89) 森川「トゥメト・十二オトク考」『江上教授古稀記念論文集』(b) (未刊)。